近代中国の社会連帯思想

――柯象峰の「社会救済」論――

筑波大学　穐山 新

1　目的

本報告は，中国の近代における中華民国後期（1928－1949）の社会学者である，柯象峰（1900－1982）の社会政策論における「社会救済」の概念と思想を検討する．20 世紀前半までの「福祉国家」体制が成立する以前の社会政策とその思想については，これまで特にイギリス，フランス，日本などに関して多くの研究が蓄積されている．中国でも経済発展に伴う社会問題を背景に，社会主義革命を経験する以前の中華民国政府の下で策定された，様々な社会立法の意義が近年注目されるようになっている．柯象峰はこうした社会立法策定の中心的な役割を果たした人物であった．本報告では，彼が「社会救済」の実現を目指す過程で直面した様々な課題や困難を解決していく試行錯誤の中で導き出そうとした，中国における固有の〈社会連帯〉の理念が何かを明らかにしていく．

2　方法

本報告では，柯象峰の『中国貧窮問題』（1935 年），『社会救済』（1944 年）などの代表的な著作を主に検討の対象とする．とりわけ，彼の「社会救済」概念を成立させている因果連関を，当時の中国における社会学的な学問の文脈と、中国社会が抱える固有の困難や条件という，二つの側面から歴史社会学的に記述・分析していく．

3　結果

柯象峰の「社会救済」論を構成している，第 1 の学問的な文脈として，アメリカの社会病理学とフランスの社会思想を挙げることができる．「社会的病態を研究することによって社会的常態を発見する」という社会病理学のテーゼは，彼を優生学へと接近させる危うさをはらみつつ，貧困を単なる異常な病理現象ではなく，通常の生理的な「社会」のあり方と関わる問題として把握する視線と文体とを提供した．またフランスのリヨン大学で博士号を取得している柯象峰は，ガブリエル・タルドやシャルル・ジッドなど，「社会」の自律性や国家の主導的役割を前提としない（現在の社会学では傍流とされる）社会思想の影響を受けており，彼の「社会救済」概念もそうした文脈から理解していくことが必要になる．第 2 の中国社会に固有の困難や条件に関して，柯象峰は救済事業を運営する「人材」および「人」の問題に繰り返し言及している．地方の救済事業の現場を視察した柯象峰は，事業を運営する地域リーダー（「士紳」）の質の悪さと，こうした人物の良し悪しという偶然性に事業の成否が左右されている現状に深刻な危機感を抱き，「人材」の育成の重要性を繰り返し強調するとともに，（西洋の「個人本位」的な文化に対して）「人を本位とする」伝統的な儒教倫理の再評価の必要性を示唆している．

4　結論

以上の検討を通じて，柯象峰の「社会救済」概念における〈社会連帯〉が，「国家」「社会」よりも具体的な「人」の役割を重視するものであったことを明らかにする．同時に，彼の「社会救済」論が実現を見ることなく挫折した理由を，そうした論理に内在する矛盾や限界から示していく。

文献

柯象峰，1944，『社会救済』正中書局.